森と海からの手紙

★1便★

長野・信濃「アファンの森」

「根開け」再生の森に春

動植物1540種息づく聖域

近年まれにみる豪雪で1㍍ほどの積雪が残る3月末の長野県信濃町。信越県境の山裾にある「アファンの森」では、木々の周りから雪が解けて地表が顔を出す「根開け」が始まり、シジュウカラたちのさえずりが春の訪れを告げていた。

英国ウェールズ生まれの探検家で作家のC・W・ニコルさん（享年79）の遺灰は、コナラの木の下の石碑の中に納められていた。

彼が武道を学びに初来日したのは、1962年秋だった。「四季が育む、世界でも屈指の多様な生態系に満ちた島国」に魅了され、来日を重ねた。当時の日本には豊かな自然と、大地に根差して生きる人の営みが残っていた。

根開けでドーナツ状の地べたが顔を出した＝いずれも長野県信濃町のアファンの森で３月29日

経済成長期の開発で山河が荒廃すると保全活動の先頭に立ち、80年には信濃町に居を構えた。荒れ果てたまま放置されて「幽霊森」と呼ばれていた10㌶の森を購入したのは6年後。「アファンの森」と名付けて再生に着手し、今では34㌶に広げて、1540種もの動植物が息づく日当たりの良い聖域となった。

彼はその森に、東日本大震災で家族を亡くした子どもたちや、心身に痛みやハンディを抱える人々を招待した。そして、森に身を置く日々の中で次第に笑みを取り戻していく彼らの姿を見守ってきた。

私がニコルさんの知己を得たのは、30年ほど前の夏だった。共通の友人であるカヌーイストの野田知佑さんらと、カヤックで四国の清流「四万十川」を下る旅に出た。

野田さんは世界各地の川を旅してきた。川をコンクリートの水路に変えて生き物たちのすみかを奪っていく日本の行政にあらがいながら、子どもたちに川遊びの楽しさを伝える「川の学校」を主宰していた。

四万十の川旅は、山河や海が子どもたちの遊び場だった時代をほうふつとさせる日々だった。大きな淵を見つけるとダイブして、ハヤやアユを追い続けた。

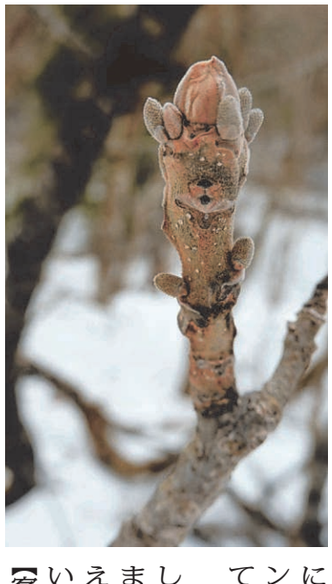
夕べには岸辺でたき火を囲み、地元の人々が差し入れてくれたテナガエビやウナギを肴に地酒を堪能。野田さんのハーモニカに合わせて、ニコルさんが自慢ののどを聞かせてくれた。

2015年には、ニコルさんと一緒に耐氷船で北極圏を巡った。彼が、極地探検家として青年期を過ごした思い出の地だった。

そこで、温暖化で崩落する氷河や生息域を失っていく白熊の姿を目の当たりにした。「同化政策」で先住民イヌイットの定住化が進み、自然の恵みを分かち合う狩猟生活は崩壊。人々は生活保護に頼り、アルコールや薬物への依存や、自殺やDV（家庭内暴力）が深刻になっていた。

健康管理には無頓着だった彼の直腸にがんが見つかったのは、16年の初夏だった。手術を経て復調の兆しも見えたが、3年後に転移が見つかった。

スマートフォン越しに声を聞いたのは、コロナ感染が拡大していた20年2月。彼は東京都内で入院生活を続けていた。


オニグルミの冬芽が、森の妖精のように見えた

「地球の行く末に思いをはせていると、果てしない宇宙に奇跡のように存在するこの星がますます小さくなって、人が金太郎あめのように均一になっていくように思えてならないよ」。悲しげな口調が、耳にこびりついている。

「最期は自宅で迎えたい」との思いから、退院して家に戻ったのは翌月末だった。1週間後に容体が急変し、搬送先の病院で4月3日に息を引き取った。

亡きがらは森に戻り、スタッフや仲間たちが野辺で摘んできたユキワリソウを添えて、出棺。荼毘の煙は、県境の空に溶けていった。

そしてこの春。私はアファンの森で野田さん（享年84）の訃報に接し、ニコルさんの石碑に報告した。

石碑には、ニコルさんの思いが刻んである。

＜森と風に耳をかたむけてほしい。なにものにもとらわれず心を開けば、きっと囁きが聞こえるだろう。よく来てくれたと＞

「森が荒廃すると川や海も荒れ、人の心も次第にすさんでいく」。ニコルさんと野田さんが共有した思いである。

アファンの森には、ほどなく紅紫のカタクリの花が咲き始める。そして、「SDGs（持続可能な開発目標）」という言葉が世間で飛び交う中、輸入材の高騰による木材不足で、アファン周辺の森では乱伐が続いている。

人の暮らしが自然と乖離していくこの時代。耳を澄ませ、森と川と海から聞こえてくるささやきを記していきたい。

【客員編集委員・萩尾信也】

＝毎月第3火曜掲載